神在祭：出雲大社に無数の神々がやってくる

出雲大社の代表的な年中行事のひとつとして、旧暦の 10 月に行われる「神在祭」があります。この時期になると、日本全国から無数の神々（八百万神）が出雲に集まり、来年の人々の関係についての会議がおこなわれます。そのため、全国的には「神無月」と呼ばれていますが、出雲では「神在月」と呼ばれています。

古代神話のルーツ

神々が出雲に集まる理由は、日本最古の文献に記されている「国譲り神話」にあります。この神話では、大国主神が農耕技術や医薬の技術を伝えて土地の繁栄を図ったとされています。天照大御神は、天上の世界から地上の世界を見て、自分の子孫が地上の国土を治めるべきだと考えました。天照大御神は使者を次々と送り、大国主神に、天皇家の祖先となる孫の瓊瓊杵尊に国土を譲るように説得しました。その結果、大国主神は天照大御神の要請を快諾して、大国主神は目に見えない世界を統治することになりました。それには神々の領域だけでなく、人間の霊や死後の世界に関することも含まれていました。このようにして、大国主神は「縁結び」の神となりました。縁結びというと、恋愛や結婚のイメージが強いですが、本来の意味はもっと広く、社会に存在する人と人とのつながりをはじめ様々なつながりを指します。

稲佐の浜に到着

神道では、旧暦 10 月 10 日の夕方、無数の神々が海から出雲に到着し、稲佐の浜に上陸するとされています。神々は「セグロウミヘビ」で知られる龍蛇に導かれています。稲佐の浜では、神職が数本のかがり火を焚き、仮の御神体（神籬-神霊が宿る神聖なもの）を設けて神々を迎えます。迎えの儀式が終わると、神職は行列を組んで神々を東へ約 1 ㌔離れた出雲大社へ案内します。

また、神迎神事をおこなう稲佐の浜は、国譲り神話の中でも重要な役割を果たしています。天照大御神が送った最後の使者が、大国主神と交渉するために到着した場所です。この浜辺にまつわる数多くの出来事があったことから、現代では参拝者にとって人気のスポットとなっています。多くの人が浜辺を訪れ、少量の砂を集めてから出雲大社に向かいます。その砂を、本殿の裏手にある摂末社の「素鵞社」のどちらか一方の脇に奉納します。参拝者は神社から同量の砂を取り、家に持ち帰り、神棚に置いたり、家の隅に撒いたりします。この行いが幸運をもたらし、災いから家を守ると信じています。

神聖なゲストの御宿：十九社

出雲大社に滞在する間、来訪神は「十九社」と呼ばれる 2 つの末社に滞在します。十九社は出雲大社の境内の東側と西側に位置する横長の建物で、現在の建物は 19 世紀初頭に造替され、

19 の扉があります。神在祭で出雲にやってくる神々の数を考えると、比較的小さな社は、不十分のように思われるかもしれません。しかし、そのデザインと名前は、古代の数の象徴に基づいています。「1」はすべての数の始まりで、「9」は終わりだと考えられていました。そのため、19 枚の扉は、無限に広い空間を表しています。他の時期には、日本中の神々に遠隔で祈りを捧げるために使われています。

訪れた神々は 7 日間かけて、来年の人々の縁結びや様々な事柄を決定します。この会議は、出雲大社の西 1 キロ、稲佐の浜の近くにある摂社・上宮で行われます。この神事の期間中、出雲には大勢の参拝者が訪れますが、会議の邪魔にならないように静かにすることに努めています。祭礼の踊りや、それに伴う音楽は小さくし、かつては近隣の大工や建設工事も行われませんでした。

神々の旅立ち

17 日に神々が出雲大社を去る時には、「神等去出祭」と呼ばれる神事が行われます。十九社から拝殿に神々の御神体（神籬-神霊が宿る神聖なもの）が運ばれ、神職が供え物を捧げた後、宮司（國造）が祝詞を奏上します。この儀式に続いて、一人の神職が本殿前の楼門の扉を 3 回叩き、神々に出立のときが来たことを知らせます。その後、神々は出雲各地の神社に赴かれますが、26 日目には二度目の神等去出祭が行われ、神々は全国のそれぞれの神社に帰路につきます。十九社の扉は閉じられ、次の年に再び神々を迎える準備が始まります。